

台湾侵攻10

絶対防衛線

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

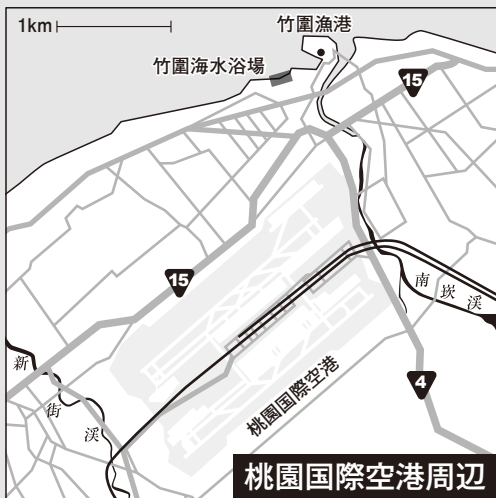
ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

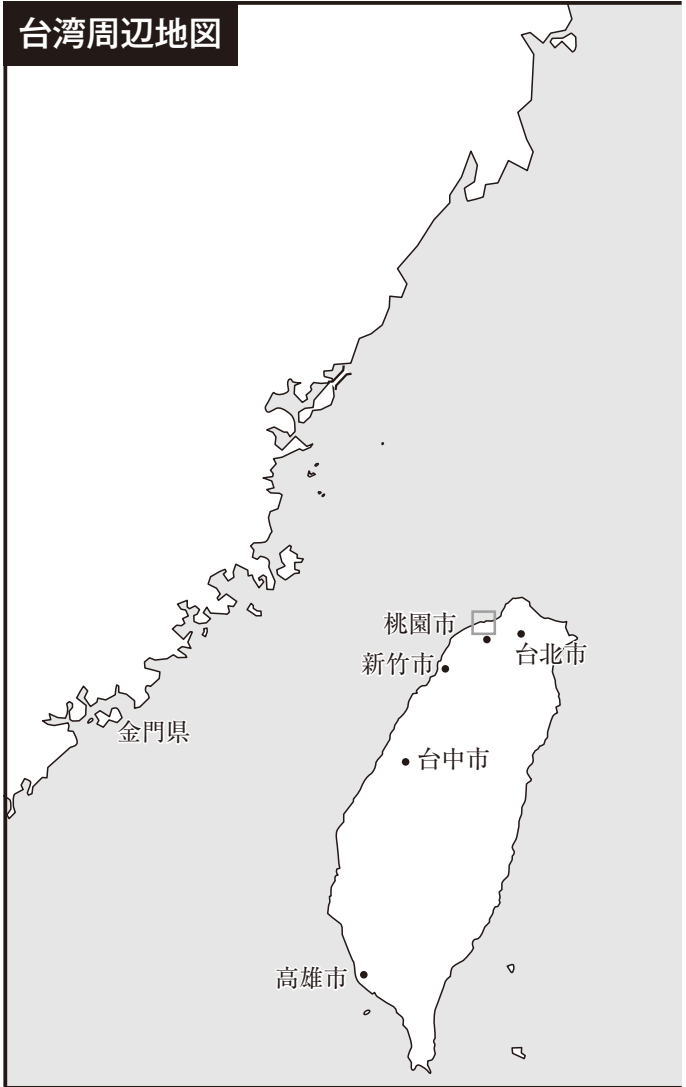
口絵・挿画
地図
平面惑星
安田忠幸

目次

プロローグ	9
第一章 捕虜	13
第二章 台北101	37
第三章 側背攻撃	68
第四章 機動戦闘車	94
第五章 和平交渉	120
第六章 絶対防衛線	148
第七章 剣ヶ峰作戦	174
第八章 核の脅し	198
エピローグ	220



台湾周边地图



台湾侵攻10

絶対防衛線

プロローグ

台北タイペイから南西へほんの三〇キロの桃園市タオイェンは、激しい雨が降っていた。早朝時点での天気予報は概ね晴れだったが、昼前に降り始め、午後には土砂降りとなった。

気象工学によって人工的に生み出された線状降水帯のせいだった。満潮とも重なり、台湾の空の玄関、桃園空港周辺は冠水状態となった。

解放軍は、その暴風雨の中、第3梯団を上陸させた。ここ桃園と、台湾半導体製造の拠点である新竹シンチュウに。

完全な奇襲上陸だった。沖合で台湾海軍と撃ち合い、また雲中を突破しての日台両軍の航空攻撃

でそれなりに数は減らしはしたが、それでも防衛側に対して三倍以上の兵力の上陸に成功した。その中には、戦車を含む機甲打撃部隊もいた。

迎え撃つ台湾側は一瞬パニックに陥り、自衛隊の加勢を得て必死に支えていた。

夕方が近づき、雨はようやく小降りになっていったが、そこかしこがまだ水浸しで、視界も悪かった。

台湾軍海兵隊《第99旅団》アイアンフックスⅡ《鐵軍部隊》の愛称をもつ精銳部隊に所属する王一傑少尉ワンイージェと、台湾陸軍臨時少尉の賴筱喬ライシヤウキョウは、空港近くで敵の捕虜になった。

王少尉は、敵と交戦中に、筱喬は、負傷兵を救出中に。敵は海岸からあつという間に押し寄せて来たのだ。逃げる暇も無く包囲された。

だが、ひとまず味方は踏み留まっている様子だった。

遠くから聞こえてくる砲撃音は、たぶん自衛隊のそれだ。筱喬は、もともと台北から桃園へと派遣された陸上自衛隊の通訳として同行したのだ。着ている戦闘服や鉄帽も、自衛隊のものだった。

二人は、民生路ミンシェンルーのほぼ西端にいた。海岸までほんの二、三〇〇メートルしかない。高速の高架下に急遽設けられた野戦病院の一角に、武装した兵士二人に見張られて腰を下ろしていた。

味方が優勢である証しに、ひっきりなしに負傷兵が担ぎ込まれてくる。だが時折、解放軍の戦車も通過していく。こちらは本物の戦車だ。自衛隊がここに持ち込んだのは、装輪の戦車。どちらが

強いのか、筱喬にはわからなかったが、王少尉にはわかった。

解放軍のそれは本物の戦車。自衛隊のそれは、MCVと呼ばれる機動性重視の軽戦車だ。

「ここは安全なんですか？」

と筱喬は、一メートルほど離れて腰を下ろす王少尉に尋ねた。ずっと両手を頭の上で組まされている。そろそろ疲れてきたが、見張りの兵士も、銃口を突きつけることに疲れたのか、今はただ肩から提げたままだ。

「高速だから、そこらのビルの屋根よりは分厚い。迫撃砲弾が降って来ても、下までほんのちよつと孔が空く程度ですよ」

さつきから、衛生兵が喚いていた。明らかに人手不足だ。すでに三〇名以上が担ぎ込まれていたが、手当てできたのはその半分にも満たなかった。負傷兵の多くが、自分で自分の傷口を押さえて

いる有様だった。衛生兵は、見張りの兵士に手伝え！ と迫っていた。

「どうして、こんな仕事を？」と王が聞いた。

「しばらく日本に留学してたんんです。本当は、銃を持って戦いたかったけれど……。でも、少尉さんも、海兵隊という感じじゃないですね？ 私より若そうだし」

「ええ。単位を落としそうになった所に、軍のリクルーターが現れて、手を回してやるから志願しろと。一応、予備役将校の訓練を受けて奨学金も貰ってましたから。それに、どうせ配備先は、後方の安全な基地だからと……。正直、今日まで良く生き延びられたと思います」

衛生兵が「とつとと手伝え！」と怒鳴っていた。

筱喬が、頭の上で組んでいた手を解いて発言の許可を求めた。

「貴方たち、血を見るのは嫌でしょう？ われわ

れは応急措置の訓練もそれなりに受けています。中国人同胞として、私たち二人が衛生兵を助けます。貴方たちは、そこで見張っていれば良いでしょう」

王少尉も賛成した。

「そうだ！ 自分は応急措置の訓練を一週間みっちり受けた。衛生兵が指示してくれるなら、それなりの貢献が出来るぞ！ 仲間を助けたいだろう？」

たぶんそういう訓練はほんの二時間だったが、包帯を巻く程度のことなら出来るだろう。

二人の見張りが顔を見合わせて「良いだろう！ だが見張っているぞ」と命じた。

座っているよりはましだ。筱喬は、民間防衛での救命訓練しか受けていなかったが、もっと真面目にやるんだと後悔した。だが、こんな所で、何もせず時間が過ぎるのを待つよりはましだろう。

負傷兵がこれだけ出ているのに軍医の姿が見えないのが不可解だった。

二人は、両手を挙げながらゆっくりと起き上がった。外を見ると、雲の隙間から、微かに夕陽が差し込んでいた。

ようやく雨が上がるうとしていた。

中国人民解放軍の東沙島奇襲上陸に端を発した台湾侵攻は、尖閣諸島を巡る攻防で日本を巻き込み、全滅した第1梯団、一度は台湾南部の占領に成功した第2梯団、そしてこの第3梯団の上陸作戦へと進んでいた。戦争はすでに三週間を過ぎ、解放軍は数百機の軍用機と搭乗員、そして陸兵三万以上を失っていたが、台湾の首都台北に着実に近づいていた。

その間、大陸では、COVID・19を越える致死性の感染症が蔓延していたが、中国は、この戦

争を止める気配は無かった。

自衛隊は、台湾本島に援軍を派遣したものの、アメリカ軍の直接参戦はなく、日台両軍部隊は、常に押され気味の戦闘を強いられていた。

第一章 捕虜

人民解放軍第164海軍陸戰兵旅団を率いる姚彦^{ヤオイテン}海軍少将は、裝輪装甲車 猛士^{モンシ}に乗って巨大な倉庫の中に突っ込んだ。

一箇所、爆撃を受けて天井から空が見えている。この破壊では、この倉庫は、もう潰すしかなからうと思った。地面は水浸したが、指揮所として使えなくはない。

桃園国際空港は目と鼻の先だが、敵の防御線を突破できずにいた。

二人乗りのバイクが水しぶきを上げながら倉庫の中に走り込んで来る。

民間軍事会社・上海国際警備公司^Sの二個中隊を

率いて二日前空挺降下した王凱陸軍中佐が後ろに跨がっていた。

バイクから降りるなり、王中佐は、「信じてましたよ！ 提督」と大げさな仕草で敬礼した。

「会えてうれしいね、中佐。空挺降下はほとんど全滅だったと聞いていたが」

「ええ。正規軍の半分以上は叩き墜されましたからね。自分も三分の一は失った」

王中佐は、「もう要らなそうだ……」とポンチヨを脱いで部下に手渡した。

「しかし、この人工雨は何なんですか？ 無線も何もかも通じなくなつた」

「詳しくは聞かされていない。お陰で、上陸部隊はミサイルを喰らわずに接近できた。しかし、こいらへんは倉庫だらけだな。どれもこれも競技場並みの広さだ」

「大陸との交易を見込んで建てられた倉庫です。われわれが潜む場所はいくらでもあります。空港から海側に民間人はもういませんから」

「それで、君がいてどうしてこんなに手間取っているんだね？」

「聞いたら驚きますよ。まずこの郷土防衛隊の指揮を取っているのは、淡水の英雄・李冠生ダンシユイ少将。そして、昨夜から加勢しているのは、あのアイアン・フォースです」

「アイアン・フォース？　なんと……。絶句するねえ。これで三度目だぞ。彼らと戦うのは」

最初は東沙島で、これは奇襲攻撃が功を奏してこちらの圧勝だった。最後は夜陰に紛れて逃げ

れたが。二度目は淡水から陽明山ヤンミンサンに掛けて。その戦いはあと一步だったが、結果として解放軍の負けだった。陽明山の反対側まで追い詰められ、今度はこちらが夜陰に紛れて潜水艦で脱出する羽目になった。勝敗としては、一勝一敗の五分という所だった。

「空港の防備は、あきれるほど鉄壁です。子供たちに使わせと土嚢を作らせて要塞化した。ケルベロスが活躍して翻弄はしましたが、戦車もなしに突破できるようには思えない」

「少年兵と、徴兵を終えて二〇年以上は経つ年寄りばかりじゃないのか？」

「そうです。だが、老兵はそれなりに訓練され、数度の実戦であつという間に昔の勘を取り戻した。あの堅牢な防備を突破するのは並大抵じゃ無い。味方の空挺は、銃と手榴弾だけでしたからね。それに僅かの軽量迫撃砲と。ところで、噂の軍神・

雷炎大佐はどこに？」

「そのの猛士で寝ている。ひどい船酔いでね……」

王中佐は、ちらと車内を覗き込んだ。

「どうやら噂通りの男のようだ。東沙島での報告を聞いて、すぐ彼の情報を集めました。ぜひうちで働いてもらおうと思って」

「ああ、戦略分析とか、君らが派遣されるような国の国情分析とかは得意だろうな。しかし、君らは上海が本社なのに、感染者は出なかつたのか？」

「自分は、例の豪華客船の事態が発生した時、海^{ウイ}南島の演習場で部隊編成中でした。訓練を兼ねて、この上陸作戦で呼びが掛かることに備えていました。直ちに外部との接触を断ち、海外で任務中の隊員には、そこを動かさず立て籠もれと命じました。最終的には、彼らも呼び戻すことになりました

たが、何しろ中国は世界各国から封鎖状態。盟友のロシアからすら国境を封鎖されて、チャーター機を飛ばしたり大変でしたよ。その話をしたら一時間は潰れます。本社からは、上海の状況が時々、伝えられてきますが、酷いようですね。本社内でも感染者が出て、社員は食料持参の家族を連れて本社ビルに立て籠もっているようです。幸い倉庫に、海外拠点向けに送り出す保存食料を溜め込んでいた。それで生き延びているようです。しかし、運悪く本社にいた隊員は、市内の治安維持に駆り出されているので、感染の拡大は防ぎようがありません。見知った部下がもう何人も死にました。噂では、上海市内では、この戦場で死んだ兵隊の数の数の市民がすでに亡くなったとか」

「それでも控えめな数字だろうな。上海だけで、街から脱出し損ねた市民が二〇〇万かそこいらは死ぬはずだ。程中尉！ 軍神を起こせ！ 仕事

だと——」

姚は、ドローンを組み立てている情報士官兼、雷炎の副官でもある程帥シュエイ中尉に命じた。

雷炎は、脚だけ地面に出すと、恨めしげな視線で二人を見遣り、程中尉が差し出した水筒の水を一口飲んでから立ち上がった。今にも吐きそうな青ざめた顔だった。

「雷炎、S I Sを知っているな？ 二日前、空挺と一緒に降りて来た王凱中佐だ」

「ああ、あの中国版『ワグネル』ですね」

と少し軽蔑の眼差しが入った顔で応じた。

「われわれは、ロシアのワグネルほど残忍でも無能でも無い。彼らはただの反面教師ですよ。軍神雷炎にお目に掛かれて光栄です」

「貴方がたがそれなりに優秀だと言うなら、われわれが敵の罠に嵌められたことにはもう気付いてますよね？」

「わかっているつもりです。台湾軍には、明確な意図と意志があった。ここ桃園を手薄に見せかけ、解放軍部隊を桃園の攻略に集中させて時間稼ぎした。われわれはそれに気付かず、貴重な上陸兵力を減らす羽目になった。まんまとしてやられた。しかし、他にどうしろと？ 今更台中に居座ったところで、戦況の好転があったとは思えない」

「戦争が終わるまで、どこかに隠れて持久すれば良かったんですよ。空挺降下では半数の兵士が空中で死んだ。皆さんはせっかく生き延びたのに……」

王中佐は、どう返事して良いかわからずに、姚の顔を見遣った。

「雷炎、手加減しろ。どう反応して良いかわからない顔をしているじゃないか？ 中佐、彼はこういう男だが、これまで結果を出して来たことも事実だ。東沙島でも淡水でも、部隊が危うく全滅す

る所を救った」

「陽明山で、どれだけの味方を犠牲にして主力を脱出させたのかも説明した方が良いでしょう」

近くで砲撃音が聞こえてくる。敵味方入り乱れた砲撃音で、煙幕弾の発射音も混じっていた。

程中尉が、クアッドコプターの小型の偵察ドローンを発進させた。

「さっき自衛隊とすれ違ったが、規模はどのくらいだ？」

「即応機動連隊という奴ですね。規模としては、われわれの一個大隊にも遠く及びません。数えたところでは、一〇五ミリ砲搭載のMCV、戦車擬きがほんの一二両でした」

「では、問題はないな。われわれはたぶん二〇〇両以上の装甲車両を陸揚げ出来たはずだ。戦車が何両か正確なところはわからないが」

「車両が十分なら、空港を無視して三峽突破に賭

ける手もあります。三峽は内陸部なので、もっと手前で台北へ出た方が良いでしょうが」

「どうだ？ 雷炎？」

だが問われた雷炎は、猛士の隣に立ち、タブレット端末を覗き込んでいた。

「たかだか一二両の戦車擬きですか？ それにしては手間取っているようですが……」

ドローンが、道路上で立ち往生している車両を上空から映し出していた。

そのほとんどから煙が上がっている。白煙あり黒煙あり、中には、オレンジ色の炎を派手に吹き出しているものもある。そして、まだ無事な装甲車両が、脱出しようと足掻いていたが、次々と砲撃を喰らって擱座かくざしていった。

最終的には、姚提督が端末を覗き込んだ瞬間から六〇秒以内に、その場でまごついていた全車両が擱座した。車両から逃げ出した兵士らが走って

戻ってくる。

「場所はどこだ？」

「空港滑走路北西付近です。ここから五キロは離れていますね」

と程中尉が報告した。

「これは、戦術で言うところのキル・ゾーンという奴ですね。誘き出されて迷い込んだ所を四方八方から殴られて全滅した」

旅団参謀長の万仰東大佐ワンヤクトンが息を切らせて駆け込んで来た。ポンチョもなしで、上半身は真っ赤だった。

「その血はどうした？」

「自分のじゃありません！ ポンチョを担架代わりに使ったので。砲撃音が聞こえましたが、あれは北に向かった連中ですか？」

「そうだ。たぶん全滅だ」

「こちらもです。滑走路南側で歩兵の展開を待て

と厳命したのに、迂闊な連中が敵の歩兵を追って前進、道路の両側から挟撃されてあつというまに戦車二両が屠ほぶられました」

「皆、命からがら上陸できて興奮状態だろう。緒戦の混乱としてはこんなものだと思うぞ。車両を伴っての作戦はこれが初めてになる。もう少し手綱をきつく締めておくべきだったな」

姚は、王中佐を参謀長に紹介して作戦を練った。「その、自衛隊の戦車擬きがたったの一二両しかないという事実をどう判断すべきだと思う？ 後続は本当にいないのか？」

「無線も回復しつつあるし、もし後続の車両部隊が現れれば、すぐ報告が来ます。そのMCVに随伴する前世紀の装輪装甲車をどう評価するかはありますが、あれは原則として、対戦車ミサイルの類いは装備していない。装甲も紙です。軽機関銃で抜ける」

「その一二両全てで空港を守っているとしても、空港を奪わないという手は無いでしょう。こちらの戦車の数はたぶん三倍はあるし、命令も、まず空港奪取に全力を尽くせ！ です。攻略目標をひとつでも達成出来れば、士気も上がるでしょう」と万大佐が主張した。

「戦車擬きとは言え、最新鋭だろう？ タイヤは路面しか走れないと言っても、この冠水状態の地面では、こちらの戦車も路面しか走れないぞ。耕作地を突っ切って、敵の背後に回り込むという戦術は取れない。雷炎、意見を述べよ？」

「毘ですよ。全部、毘です。空港目前で敵の戦車はたったの一二両と見せかけて、いかにも簡単に抜けそうな錯覚を与えるだけ」

「ではこのまま空港を横目に見つつ三峽へと向かうか？ あるいは一本手前の幹線道路を台北へ」

「山越えは、暗くなつてからになります。双方、

暗視装置を使つても、一番目立つのは歩兵では無く戦車だ。つまり、どの道、夜間の戦闘では、戦車は目立つ。自分としては、せつかくこういう巨大な倉庫があちこちにあるのだから、明日の朝まで車両はそこに隠して置くことを勧めますね。どうしても空港攻略に拘るなら、夜間は歩兵同士で睨み合う程度に留めて、夜明けとともに戦車を投入して仕掛けることを提案します」

「完全な日没までまだ二時間かそこいらはあるだろう。敵の増援が来る前に決着を付けるべきだ」と万大佐が反対した。

「決着が付かなかつたら、われわれは明日の朝、海岸線まで追い詰められて、野砲なり、爆撃なりで全滅する羽目になる」

「たった一二両か……、たった一二両の戦車擬き……。王中佐の意見は？」

「ケルペロス」がいます。われわれは二〇体受

け取りましたか？」

「ああ、たぶん、無事ならどこかに降りたはずだ。あと四、五〇体はな」

「明るい内に、戦車擬きを少しでも減らして、暗くなったらケルベロスを出して敵歩兵を翻弄しましょう。前夜の戦闘情報をフィードバックしてパツチを当て、ある程度改善されたと聞きますし」

「雷炎、それで手を打たないか？」

「台北から増援が来たら、全てはご破算になりますよ」

「私は来ない方に賭けるね。彼らは台北防衛にか関心はないだろう。だから少年兵も置き去りにされている」

雷炎は不承不承という顔で頷いた。

「参謀長も賛成なさるなら、三対一だ。自分が反対しても仕方無い。でも、空港を制圧してどうします？ 今ですら滑走路は孔だらけ。しかもシヨ

ベルカーで掘った塹壕が横切っている。航空優勢も無く、われわれが空港に立て籠もっても、砲撃で全滅するだけだ」

「まあ、総統府が、この空の玄関口を廃墟と化す覚悟があるならそうするだろうが、それは制圧してから考えよう。桃園空港制圧は、人民を勇気づける」

「疫病でそれどころじゃない人民がそれを聞いたとて、第4梯団の作戦があるとは思えません。何もかも無駄だ」

「時間は掛かるだろう。三日とか、あるいは一週間とか。だが、台湾軍だって、そう兵士の命を無駄には出来ないだろう。われわれは増援が来るまで持ち堪えてみせるさ。では決まりだ。王中佐、援護と、台北方面の監視をよろしく頼むぞ」

「お任せを——」

王中佐がバイクで走り去って行くと、雷炎は、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。